３

靖は記者が帰ってホッとしていた。と同時にある事に気付いた。それは自分の考えが“彼女”に伝わってるという事だった。記者にどう対処しようかと考え始めた時にスーッと“彼女”の考えが脳に伝わってきた。それで難なく切り抜けられたのだった。しかし自分の考えてる事が筒抜けだという事は、あまり気持ちの良いものではなかった。

“ゴメンナサイね”と、彼女からの言葉が脳に届いた。

「いや、謝る事はないよ。助けられたのだから・・・」

“そうじゃなくて、あなたの考えてる事を“盗聴”しちゃって“

「いや、いいんだ。緊急事態だったからさ。でも一つ聞きたいんだけどいつも俺の考えてる事が分かってるの？」

“そんな事はないわよ。私もまだ誰にも存在を知られたくないから危機回避としてあなたの脳にアクセスしたの”

「ふーん、そう言う事だったんだ。でも君って本当に超能力者というか宇宙人みたいだよねえ・・・」

“あ、あ、そう・・・”彼女は微妙な表情を見せた。

「まあ、どっちでもいいんだけど。とにかく凄い情報を俺に送ってくれているけど、いいのかなあ・・・」

“あ、その事。どうに取ってもらってもいいし、どうに使ってもらってもいいわよ”と、事も無げに言った。

「じゃあその情報で一旗あげてもいいのかなあ・・・」

“そうね、お金儲けをすると言う事？”

「まあ、取り敢えずはそうするだろうねえ」と、靖はまだ具体的には何の計画も有るわけではなかったが、何となく考えていた。

“そうよねえ、あなた達は先ずお金の事を考える傾向が強いものね”と、やや奥歯にものの挟まった言い方をしてきた。

「でもお金がないと食べて行けないから。君の食費はかなり凄いよ」と、正直に言った。

“そうよね、ゴメンナサイ。あなたの給料を食べ尽くしちゃうようね・・・”

「そんなこともないけど、俺の食費より多いかも」

彼女は一食しか食べないが半端な量ではなかった。

“ここで暮すには自分の食費くらいは稼げるようにならないと・・・”

「いいんだよ、気にしないで。君との生活も結構馴染んできたら楽しいし。お金の事だったら大丈夫だよ。何か君からの情報を使わせてもらって、バイト程度の事でも何か始められるか考えてみるから」

靖はこのお宝のような情報をどうに生かすかまだ分からなかったが。

４

１年後。ある占い師が週刊誌で話題になっていた。占い師と言うより“預言者”とまで言われていた。ことごとく未来を、運命を言い当ててしまうとまで囃し立てられていた。突然現れた「立青（りっせい）」と言う若い男の人だった。フードを被ってる横顔の写真も大きく撮られていた。一躍時の人といった持て囃され方だった。週刊誌のネタにも打って付けの話題だった。各誌もこぞって書きたてた。今や日本中で一番有名な占い師かもしれなかった。

　ただテレビ出演は皆無だった。写真で見るだけでライブ映像が無いということも手伝ってか謎に満ちた感じがあり、それが一層カリスマ性を増して占いに行列が出来るほどだった。

　新聞記者の今井由紀はある日、週刊誌を見てると写真から何か記憶に引っ掛かるものを感じた。占い師の「立青」という青年の顔に見覚えがあるような気がした。昔、どこかで会った事があるような感じなのだが思い出せなかった。どこにでもいるような平凡な顔かたちをしてるからだろうか。でも確かに一度は会ってる気がする。

　毎日のように色んな人と会ってるので勘違いだろうかとも思ったりしていた。こんな平凡な青年が“預言者”とまで言われてるのが信じられなかった。占いには興味があるので取材ではなくプライベートで行ってみようかとも思い始めた。

占い師「立青」は多忙を極めていた。占い師の人たちには悪いが最初は気軽に片手間で日銭を稼ごうと思って始めたのだった。占いの勉強なども全くしていないし、また師匠がいるわけでもなく全くの素人がある日「占い師」の看板を揚げて始めたのだった。

　ただ彼にはある情報源があったので、当たるも八卦当たらぬも八卦などと言う確率を軽く飛び越える確度でその人の占いをする事ができた。当人しか知るはずの無い事もピタリと言い当てられると、あとはもうこっちのペースで話せた。

　ここまで有名になったのは、お忍びで来る政治家や会社経営者にまで的確な“アドバイス”をしていた事だった。占いの範疇を越えていたので“預言者”とまで言われるようになったのだった。週刊誌にはイニシャルで政治家や大企業の経営者のコメントも感動を持って載せられていたので反響も大きくなるばかりだった。

　好奇心旺盛な由紀は会社を終えた後、あの占い師に会ってみようと思い行列に並んでいた。それでも１時間ほど待つと順番が来た。中に入ると普通の住居の一角をただ仕切っただけの簡素なスペースに椅子とテーブルが置いてあるだけだった。少し雰囲気があるとすれば、間接照明の明るさが少し暗い事だけだった。これがあの“預言者”の館だとは到底信じられない殺風景さだった。雰囲気で盛り上げる必要など無いという事なのだろうか。

　写真にもあったフードを被った青年の前に座った。由紀はアッと思った。思い出したのだ。この青年に以前会っていた事を。やはり自分の記憶の引っ掛かりに間違いは無かった。

変な人生相談の手紙をくれた人に違いなかった。どうしたものか・・・。名乗ったほうがいいのだろうか。迷ってると占い師の方から話しかけてきた。

「どうもいつぞやは失礼しました。変な投書をしてしまって、すみませんでした」と、機先を制された感じになった。

「いえ・・・。そんなことは・・・。でもやはりあなたでしたか。週刊誌などで見かけるお写真を見て以前会った事があるような気がしていました」

「そうでしたか。週刊誌の取材には応じているもので。でもあんな大袈裟に書かれて困ってるのです。そんなに偉くも立派でもないので」

「でも凄い占いの力をお持ちみたいで。普通じゃあ考えられないような“予言”までしてるので驚いています」

「はい、その事ですか。自分でも突然備わった力ですので戸惑いもあります。でも世の中の力になればと思ってこの占いの仕事を始めてみました」

「ちょっと気になったのですが、その力って手紙にあった“宇宙人”さんと関係あるのですか」

「いえ直接は関係ありません。ただ幻聴を聞いてから突然“未来が聴こえる”ようになったのも事実です」“彼女”から伝わった言葉だった。なかなかの表現力だ。嘘はついていない。

「なるほど、そうだったのですか。未来が聴こえる・・・。ノイローゼになりかけたくらいの神経の高ぶりの時にその力が備わったのでしょうか。凡人の私から見れば逆に羨ましいくらいです」由紀は“未来が聴こえる”という言葉にちょっと引っ掛かったが非凡な人の言う事は違うなあと思うくらいで聞き流した。

　由紀は自分の結婚運とか診てもらおうと思ってやってきた事を思い出した。が、何故かどうでもいいように思えてきたので。このまま世間話でもして帰ろうと思った。すると占い師、立青は由紀の心を読んだかのように話し出した。

「折角来たのですからお若い女性の定番の結婚運を占いましょうか」

「あ、いえ今日は結構です。プライベートで来たつもりだったのですが、やはりあなただったと分かって、胸のつかえが降りたようでさっぱりしました。それに何故か身内に占ってもらうようで気恥ずかしいですし・・・。あ、すみません赤の他人なのに」

「いえいえ、とんでもないです。そうに言ってもらえると何だか嬉しいです。いつか赤の他人じゃあなくなるかもしれないですし」

「！！！・・・・・」

「あ、すみません、冗談です。あ、そうか僕は占い師だったんですよね」

「お話もお上手な人だったのですね。面白い人」